

第四十六回 「全日本中学生水の作文コンクール」

広島県優秀作文集

令和六年

広島県土木建築局

目次

優秀賞

かけがえのない存在

広島県立広島叡智学園中学校

二年

岡田 そら

「青い惑星」

広島県立広島叡智学園中学校

二年

服部 翠

「水がない生活を体験して」

尾道市立日比崎中学校

二年

山根 悠羽璃

入選

水との上手な付き合い方

広島県立広島叡智学園中学校

二年

武田 夏子

ダムマニアの母

広島県立広島叡智学園中学校

二年

島崎 華帆

「水と日本文化と持続可能な社会」

広島県立広島叡智学園中学校

二年

櫻井 和奏

川をきれいに

広島県立広島叡智学園中学校

二年

水ノ上 七菜

かしかの水

広島県立広島叡智学園中学校

二年

鶴田 莉子

綺麗な水を世界に広げるために

広島県立広島叡智学園中学校

二年

新田 一仁

「見えない水」について考える

広島修道大学ひろしま協創中学校

三年

沖本 万泰

優 秀 賞

かけがえのない存在

広島県立広島叡智学園中学校 二年 岡田 そら

私は全寮制の中学校に通っている。そのため掃除や洗濯などを自らで行っている。そのような日々を過ごしている中で親への感謝を感じると同時に気づいたことがある。それは水が日常のあらゆるところで使われているということだ。手を洗ったり、食器を洗ったり、洗濯したりなど日常生活において水の存在は大きいと改めて感じた。今までは洗濯も食器洗いも全て親がやってくれていた。自分で家事を行うようになったことで水の偉大さについて改めて知ることができた。

それと同時に思い出したのが小学校で行った水の授業だ。授業では主に水の大切さについて教えてもらった。その授業を思い出し、改めて水について調べてみた。すると世界には水道の設備がない暮らしをしている人がとても多くいるということが分かった。その数は約二十二億人で世界人口の約四人に一人にものぼる。また、私たちが生活用水や飲み水などに使用している淡水は地球にある水の二・五%に過ぎないということも分かった。これらのことを知った時、親が家でよく言っていた「水を無駄にしない」という言葉の意味が分かった気がした。私達は今、水を当たり前のように使い、飲むことができているが世界を見つみると安全な水を満足に使うことができている人達が沢山いる。今の自分の状況はとても恵まれており、当たり前ではないと自覚することが大切だと感じた。

また、世界の水問題を少しでも解決するには自ら行動を起こさなければならぬと思う。小学校の水の授業でも水新聞を少しでも解決できるようにという目的で作成した。しかし、果たしてあの時の自分は水を当たり前に使えていることへのありがたみを感じていたのだろうか。書いたことをきちんと実践することができていたのだろうか。おそ

らく課題を終わらせるためだけに作成していたのではないかと思う。水が有限であるものということは理解していたが、世界の水問題を自分事として捉えることができていなかったのではないかと思う。しかし、中学生になり自分で家事をすることが増えた今、改めて行動を起こすことができるのではないかと思った。そのため、まずは自分の行動を振り返ってみた。すると水を出しっぱなしにしていたり、飲み切れない量の水をコップに注いでいたり改善点が多く見つかった。まずはこれらの普段の生活の改善点から直していき、水問題の解決に努めていこうと思った。また、これからは具体的に具体的な目標を立て、その目標を見える化し、忘れないようにして行動していきたいと思う。

世界の水問題は一人一人が自分事として捉え、行動していかないと解決に近づかないと思う。しかし、多くの人が自分事として捉えられていなかったり、水問題についてあまり知らなかったりする現状がある。まずは今すぐにも行動できる私達が積極的に行動していくことが大切だと思う。寮生活を通して水は私にたくさんのお話を教えてくれた。今度は私が水というかけがえのない存在を守っていききたい。いつか世界中の人々が安心して水を使うことができるようになることを心から願っている。

優 秀 賞

「青い惑星」

広島県立広島叡智学園中学校 二年 服部 翠

「青い惑星」

そう呼ばれるほどに、地球のほとんどは海で覆われています。

現在、地球上にある水は約十四億立方キロメートルにまで上り、地球の表面の七十パーセントは水で覆われていると言われています。しかし、そのうち私たちが生活や飲むことに使える淡水はたった二・五パーセントしかありません。そのたった二・五パーセントの水で、私たちは普段の生活を送っているのです。

今年、世界の人口は八十億人を超えました。しかし、そのうち安全な水を飲むことができない人は、二十二億人もいます。つまり、十人に三人は安全な水を確保できていないのです。さらにこの二十二億人のうち、湖や河川といった処理が施されていない水を飲んでいる人は、一億五千万人にまで上ります。

考えてみてください。私たちは、普段の生活でどのようなことに水を使っているでしょうか。朝起きて顔を洗うとき。ご飯の前に手を洗うとき。喉が渇いて水を飲むとき。お手伝いでお皿を洗うとき。寝る前に歯磨きをするとき。トイレの水を流すとき。疲れてお風呂に入るとき。数え出すときがありません。私たちの生活と水の関係は、切っても切れません。しかし、この世界では、水をめぐってたくさん争いが起きています。遠く離れた異国では、一日の大半を使って生活に必要な水を運ぶ子供がいます。そのために、学校に行けず、教育が受けられない子供もいます。

もう一度、自分の生活を振り返ってみてください。水の無駄遣いはしていませんか。必要以上に「流す」ボタンを押していませんか。流しっぱなしに気づいていませんか。

私たちが使えば使うほど、下水はどんどん汚れていきます。知らない間に、水の中には汚染物質が含まれていき、いつの間にか安心して使えなくなってしまう。キッチンを覗いてみてください。食べ終わった後のお皿が置いてあります。そこには、たくさんのお汚れがついていました。あなたはそれをどうしますか。ほとんどの人は、「食器用洗剤を使って落とす」と答えるでしょう。しかし、食器用洗剤を使ったところで、その油汚れはお皿から落ちてても下水の中には残っています。もちろん、下水処理センターではその汚れを落とすために、たくさん作業を行っています。しかし、私たちが必要以上に汚れを生み出すことで、どんどんその作業が間に合わなくなってしまう。

たったひと手間、水で流す前に油汚れをさっと拭き取れば、その汚れの大半は水を汚すことなく落とせます。地球を傷つけることなく水を使うことができます。世界では、たくさん環境問題が叫ばれています。大気汚染、海洋汚染、土壌汚染。そして、水質汚染。どれも、私たちが人間によって汚されてきたものです。知らないうちに、日々のちよっとしたこと地球を痛めつけていると知ったらどうでしょう。これから何百年も、何千年も続いていく地球が、私たちのせいでどんどん汚れていくのです。地球ができて四十六億年。その長い歴史の間で、私たち人間が生きてきたのは、たったの五百万年です。これまでの長い長い歴史が、一瞬にして失われてしまうのは、とても悲しいことです。

これから先も、この青い惑星で過ごしていくために、私たち地球人は、「地球を守る義務」があります。私たちが生きていくうえで欠かせない、水を守る必要があります。流しっぱなしにしない。油を流さない。必要以上に使わない。できることは山ほどあります。どれも日々の生活の中で少し意識すればできることです。これからも続いていくであろう、この地球の歴史を守るために、一人一人が地球人としての自覚を持つべきです。そして、いつまでも「青い惑星」があることを願います。「今」ではなく「未来」に目を向けて。

「水がない生活を体験して」

尾道市立日比崎中学校 二年 山根 悠羽璃

それは突然起こりました。六年前、台風と梅雨前線による豪雨によって、私が住んでいる町のいたる所で土砂災害が発生し、河せんが氾らんし、浸水が起りました。そして、市内全域が断水しました。この日は、学校は休校になっていて、私は家にいましたが、帰ってきた母が、「これから断水になる」と言い、私はそれがどうということか分かりませんでした。今まで経験したことがなかったからです。

水道から水が出なくなる、トイレが流せなくなる、お風呂にも入れなくなる、洗たくができなくなる、ご飯を炊いたり、料理をするのも難しくなり、お皿も洗えなくなる。急に今まで普通にできていたことができなくなり、日常が一変しました。洗たくは隣の市の「インフンドルー」へ、お風呂は水が出る銭湯や温泉へ。私はまだ小さかったので、こんなことを楽しんだりしていましたが、毎日公園へ来る給水車へ水をもらいに行き、限られた中で生活していくことがだんだん辛くなってきました。特に夏の暑い時だったので、長い列に並んで毎日水をもらいに行くだけでも大変でした。

今から思うと、たった二週間くらいの期間だったらしいのですが、水がないということの恐ろしさを痛感した時でした。

そして、この水災害は、同じ学区内で死者も出しました。たくさんのお雨により、死者を出し、その後、私達は、水のないことで生活を苦しめられました。

水は生きていくために大切だとは思っていたけれど、実際にどんなことで水を必要としているのか、水に頼っているのかを考えたことはありませんでした。

あれから毎年のように大雨が降り、全国各地で災害のニュースが流れます。あの時、私が小学校低学年で体験したことがあるせいで、そういうニュースは気になってしまいます。きっと同じように困ったことになっているだろうなと想像できます。知っているからです。

水は災害だけでなく、人や生物に恵みをもたらせてくれることも私達は知っています。生き物が生きていくためには、絶対に必要だということも。そして、そのことに感謝もしています。

自然の力は大きいので、私達は降る雨を止めることはできないし、必要な量だけ降らせることなんてこともできません。ただ人として、その力に向き合い準備しておくことはできます。大雨が降ること考えられる土砂災害、断水、洪水などに対する備えをし、完全に防ぐことは難しくても、起こった時にできるだけ被害を少なくできるように、少しでも安全でいられるように準備することは可能だと思います。

私は中学生なので、できることは限られています。家で水をストックすることはかささないようになりました。そして断水の時に水の大切さを学んだので、水の使い過ぎはしないようにこころがけるようになりました。日本は水の豊かな国だと言われていますが、貴重な水にもなるということを知ったからです。

水があることを喜び感謝し、大切な水という気持ちを忘れずにいようと思います。

水との上手な付き合い方

広島県立広島叡智学園中学校 二年 武田 夏子

水は生きている上で欠かせないものだ。人間の体内の五十から七十五パーセントは水で構成されていて、水なしでは五日も生きてはいけなと言われている。このように、水は生命をつなぐ存在ではあるものの、時に人の命を奪う存在にもなる。津波や洪水はその一例だ。だからこそ、命に関わりが深い水とは上手に付き合い合っていくことが必要不可欠となってくる。私は、「自然と調和した工夫」をすることが上手に付き合い合っていく上で大切になるのではないかと考える。人が水を人工的に操ったり制御したりするのではなく、自然の原理を活かしながらも人工的な工夫を加え、コントロールする。そうすることによって、水による被害が少なくなるだろうと私は推測する。

私がこのような考えを持つようになったのは、戦国武将である武田信玄の治水構想を知ったことがきっかけだ。私は、小学三年生の時から日本史に興味があり、同じ苗字であった武田信玄に関心を持った。彼に関する本を読んでいくうちに「信玄堤」の存在に辿り着いた。武田信玄の統治していた甲斐国は川の氾濫が絶えない地域であった。もともと川が多かったことに加え、春になると南アルプスの雪解け水で水嵩が増え、雨が降らなくとも洪水が頻繁に起こった。信玄は洪水に苦しむ民を救うため、川について研究し、堤防を築いた。彼の技術はとても工夫されており、江戸城建設の際に参考にされていたり、現在でも使われていたりする。信玄堤の大きな特徴は、水を堤防のみでコントロールしているのではなく、地形などの点も視野に入れながら水の勢いを徐々に弱めていくことだ。信玄堤の仕組みは次のようになっている。御勅使川に石積み出しを置いて流れる向きを変えた後、将棋頭と呼ばれる石を積み上げた

もので川を分断して勢いを弱める。その後の御勅使川と釜無川の合流地点では水の量が増えて氾濫が起きやすいため、自然の高岩をおき、水の勢いを弱める。高岩下流の左岸には堤防を築き、決壊した時に向けて霞堤という水が溢れ出すことを前提とした不連続な堤防を築いた。信玄堤が完成したことによって、農民たちの被害は減り、農地が拡大し、甲斐の国の国力は以前よりも強まった。このように、信玄堤には水と上手に生きるための「自然と調和した工夫」があり、水の勢いを全体的に弱めて水害による被害を減らすことに成功した。この考え方は現代にも活かせると思える。

現在、川の多くは回りをコンクリートで固められ、真っ直ぐに流れている。しかし、コンクリートでは水害の時に水が染み込む場所や勢いを弱められる場所がなく、被害が大きくなってしまふ。私の祖母と従姉妹は西日本大豪雨で被災しており、二人とも避難所となった学校で約一年間も滞在していた。私は家族と共に祖母の家の掃除を手伝いに行った時の変わり果てた光景を見て驚いた。なぜなら、氾濫した川は水位がとても低く、回りをコンクリートで固められただけの小川だったからだ。私はその小川をじっと見つめながら信玄堤のことを思い出した。もし、信玄堤のように川が少しでも水の流れる地形や場所などを活かした工夫があれば、水が行き場を失って溢れ出すことはなかったかもしれない。どんなに人が技術を発展させても自然の力には完全に勝つことはできない。そのように感じた。

これからも、水による被害は続くだろう。しかし、「自然と調和した工夫」という発想を持って水害による被害から改善を重ねていけば、水害に強いまちづくりをすることができるのではないかと私は考える。

入選

ダムマニアの母

広島県立広島叡智学園中学校 二年 島崎 華帆

私の母はエセダムマニアだ。なんでもダムは人類の英知と技術を集結して造り上げられた巨大な建造物だそうだ。「ダム建設にはコンクリートのひび一つが命取りになるため、細心の注意を払って作られている。また、山奥に佇む利水ダムに貯まった広大な水は湖のようで見つまでも見ていられる癒しにも感じる。」と母は言っている。

また、ダム鑑賞とともにカードを集めるのが楽しいらしい。ダムカードの表面にはダム全景の写真、裏面にはフォルムや構造とダムを作った機関(国、都道府県、電力会社)が載っている。

私は父の転勤の関係で新潟、富山、福井に移り住んでいるが、どの県にも立派なダムや建設中のダムが存在していた。富山には有名な黒部ダム、福井には建設中の足羽川ダムがある。母と訪れたことがあるが、本当に立派でこんな山奥によくこんな大きい建造物を建てたな、すごいなと感心した思い出がある。

しかし、観光資源としてはあまりにも規模が大きい。

日本は島国で水が多い国なのに、なぜ水が必要なのだろうか。

日本は世界の中でも降水量が多い地域だが、一人当たりの降水量で見ると世界の平均の約三分の一程度になってしまうそうだ。また、河川の長さが短いので、山に降った雨はすぐに海へ流れてしまい、川に水がある時とない時の差が激しく、安定した水の利用が難しいという環境の厳しさが理由として挙げられる。その問題をダムで行える治水と利水で解決しているそうだ。

では、ダムの治水と利水とはどういったものだろう。

一つ目の治水とは、大雨で増えたたくさん水を貯めておくことで川

を流れる水の量を調整することらしい。もしダムがなかったら川の水があふれて、洪水になってしまうそうだ。

二つ目の利水とは、水資源の確保が挙げられていた。水道用水、工業用水、農業用水など様々な用途の水をダムの貯水で調整して供給しているそうだ。また、その水を高いところから落とすことにより、タービンを回して発電する役割を持つそうだ。

一方でダム建設にはダム予定地で、反対を唱える地域の人々と国や県等の担当者は長い間苦悩し、地域が分断されてしまったりスクやダムが生態系に及ぼす悪影響(水質の悪化、ヘドロ化した土砂の堆積)などの問題が報告されているそうだ。

しかし、母は「最近の異常気象のずっと前から豪雨によって川の氾濫や土石流、がけ崩れ、地すべりなどが発生しやすく、人々の生活や生命が脅かされるような自然災害が度々発生しているからダムは必要なんだよ」と教えてくれた。

母がダムマニアになった理由には平成十六年の福井豪雨の影響があるらしい。

福井豪雨とは、狭い範囲に豪雨が集中し数時間で一ヶ月分の降雨が発生。まさかの足羽川決壊、氾濫、鉄道が寸断され、道路は川になったそうだ。人的被害は死者四人、行方不明者一人、負傷者九人。住家被害は、全壊六十九棟、半壊百四十棟、一部破損二百二十九棟にも及んだ。その時、治水の大切さを改めて感じたと言っていた。今建設中のダムは、川や山の環境そこに暮らししているたくさん生き物がダムができた後も上手に暮らし続けているように計画が立てられているそうだ。

私は自然の脅威と共に自然や地域との共存がいかに難しいことかはこの事から知った。私たちは昨今の環境の変化に対応できる治水や利水のあり方について考え、これからの自然との共存を築いていくことが大切だと思った。

「水と日本文化と持続可能な社会」

広島県立広島叡智学園中学校 二年 櫻井 和奏

「水」という言葉を聞いたら雨、海、川などの自然を思い浮かべる人もいれば、水不足や海水汚染など地球全体で抱える課題を想像する人も多いと思う。私はこれらに関することも考えるが、日本の伝統文化を思い浮かべる。

古くから私たちの生活に隣接し、欠かせない存在となった水を活用した日本の文化があることを知っているだろうか。海に囲まれた島の中で知恵を最大限に活かして作られた伝統工芸品の中に「水うちわ」というものがある。この水うちわは私たちがよく見る普通のうちわとは違い、水を直接使うのである。岐阜県で生まれたこの伝統工芸品は和紙でつくられていて、一見普通に見える。しかし使用方法が一味違うのである。うちわ全体を水につけてから仰ぐのだ。水で全体を濡らすことにより、仰いだときに水飛沫が生まれ、涼しさを味わうことができる、という仕組みだ。この仕組みによって私たちは暑い夏を涼しく過ごすことができるのである。

この水うちわだけでなく、「打ち水」という方法も古くからの工夫と水が使用される。私の家でもこの方法をよく活用していたが、かなり効果がみられた。まだ朝日が上りきっていない時間帯に外の地面に水を撒く。そのことによって撒いた水が蒸発し、地面の熱を吸収してくれるのである。

このように水は昔から私たちの生活に活用されてきたのである。そして私たちの生活の基盤になっている。水を活用し自分の生活や健康をいかに良いものにするかが大切なのではないかと考えるようになった。

私たちが生きる上で必須であるこの「水」は現在大きな課題を抱えている。その一つが水不足だ。日本で生活していると飲み水に困ることが

少ないと思うが、世界規模で見ると安全な飲み水を確保することができない地域が多く存在するのである。世界の人口の四割以上が悩み、今後この割合が増加すると予測されているのである。水不足の問題がより深刻化するとうなるのか。少なくとも戦争や対立に発展すると思われる。水資源の配分や所有・開発を巡って人々の間で争いが引き起こることが予想できる。

今もなお水不足で苦しむ人が絶えない中、この状況を改善する為に募金という手段を選択することを勧める。

小学生の頃、委員会の活動でユニセフ募金の取り組みを実施したことがあった。当時の私は一体募金は何の為にするのか、何の為に使われるのかを知らなかった。そこでネットでユニセフのホームページを閲覧した。すると、世界の子供を病気から救う活動を沢山行っていること知り、その中でも水質を改善するための活動にも取り組んでいることに驚いた。実際に自分たちの手で水不足の改善ができない為どうしようもないと思っていたが、募金することで飲み水が確保できると知った。

このときから募金に対する意識が変わると同時に水の大切さを再確認することができた。そして毎日何気なく使っている水を無駄のないように工夫して使用することができるよう常に注意するようになった。「水を大切に使う」という考え方がより多くの人に伝わってほしいと、私は思う。そして世界が持続可能な社会へと変化してほしい。その為に資源の大切さへの理解と学びを深めていきたいと思う。

川をきれいに

広島県立広島叡智学園中学校 二年 水ノ上 七菜

私の住んでいる市、福山市には「芦田川」という川がある。芦田川は少し前まで水質がとても悪く、中国地方の河川の中で三十六年連続ワースト一位であったという実績を持っている。

しかし、芦田川は過去に、江戸の水道に並ぶほど優れた福山城へ続く水道の水源として使われていた。このように、生活用紙として使われていた過去から、芦田川の水は現在に比べてきれいだったのではないかと私は考える。ではなぜ芦田川の水は汚くなってしまったのだろうか。芦田川の水は、その九割が工業・上水・農業用水などに広く利用されている。しかし、人口や産業の集積が進む一方で下水道整備が立ち遅れてしまっている。このことが、芦田川が汚れた原因である。また、この他の原因として、川原や川へのポイ捨てが挙げられる。その理由として、犬の散歩などで芦田川に行ったとき、空き缶や発泡スチロールなどが捨てられているからである。これらの理由から芦田川は汚れてしまったが、最近では水質が改善されはじめ、ワースト一位を逃れることができている。しかしまだきれいな川とは言いがたい。では、芦田川の水を生活用水として使用している私たちが、水質改善のためにできることは何だろうか。私は、下水処理などの大きなことをするとはできないが、「ゴミ拾いのボランティアに積極的に参加したり、芦田川についてを他の人に知ってもらうこと」で芦田川の水質を改善することができると思う。小さな努力の積み重ねが、水質改善にとって大切なのではないだろうか。これらのことから、私は自分ができる最大のことを日々やっていると考える。また、その努力を他の市町村や都道府県に伝えることにより日本全体の水質改善につながり、日本のSDGs六や十四の目標にも影響を与えることになるのではないだろうか。それは遠いことではある

が一人一人が日々努力を続けることができれば、決して不可能ではない。私もそのことを意識し、日々努力に努めようと思う。

かしかの水

広島県立広島叡智学園中学校 二年 鶴田 莉子

水。それは、私達の生活において切っても切り離せないものだ。水にはたくさん種類がある。そして私は、それらの中で最も『かしかの水』が好きである。なぜなら、私の祖父よりもっと前から続く私の家系の人々の生活を潤し続けてくれているからである。

私の祖父は、先祖代々受け継がれている山で畑仕事をしている。彼は生まれた時から今までずっとあの山のふともの村で育ってきた。その山には、畑から少し歩いたところにかしかの水という湧水がある。この水は、祖父の村に住む人々にとっても大切な水であり、今では少ししか出てこないが、昔は水道のような水力で流れていたそうだ。私はよく夏休みに祖父の畑仕事を手伝うが、暑い中力仕事をするとすぐに喉が渇いてしまう。その度に、祖父や姉妹と共にかしかの水を飲み、喉を潤している。真夏の手伝いの後の冷たい湧水は、毎回驚いてしまうほど美味しい。そのため、私はまたあの畑に行きたいと思う。

ある日、祖父達と家で夕食を食べていたときに、祖父が、彼の経験も交えてかしかの水について語ってくれた。あの水は、祖父のまた祖父や、それより昔に村に住んでいた人々も日常生活で使っていたそうだ。祖父の小さい頃はまだ水道が普及しておらず、一軒ずつ井戸があり、その井戸で地下から水を汲んでいたそうだ。そして、料理をするにも洗濯をするのにもその水を使っていた。井戸の水は地下の水なので、山から出るかしかの水のように完全に自然からのお裾分けである。だが私は、水道が無い生活なんてあまり想像できなかった。今の私の生活では、蛇口を一捻りすれば水が出てくる。しかし、昔はそれが決して当たり前ではなく、水を手に入れるのにも一苦労だったのだ。私は、水は限りある大切

で貴重な資源なのだといいことに気がついた。

そして、祖父は彼の祖母が息を引き取る瞬間に立ち会っており、死に水としてかしかの水を使ったそうだ。その、私にとっての高祖母もかしかの水のそばで育ったため、亡くなる間際にかしかの水を頼み、祖父は彼の父と一緒にかしかの水を汲みに行った。私はその話を聞いて、かしかの水は顔も知らないような先祖様が暮らしていた時から私たちの生活にとって大きな役割を担ってくれていたのだということを感じた。そして、生まれたその時から帰らぬ人となるまで使われていたかしかの水が、なんだか誇らしい気持ちになった。まさか、様々な人の人生を支えた水があるなんて、考えてもみなかった。そして少し、かしかの水を通して祖父達の昔の生活を知ることができたような気がした。

それからというもの、畑に行く時は以前にも増して必ずかしかの水を使って手を洗ったり飲んだりするようになった。水が湧き出ている管の隣には一体のお地藏様が立っており、長い間このかしかの水を守ってくれている。そのため、祖父はお彼岸やお盆には花を持って行き、お参りするそうだ。私も、できる限り祖父とともに感謝の気持ちを持ち、お参りしていきたいと思う。今は昔と違って水道がほとんどの家庭に普及しており、このような湧水をわざわざ汲んで使う人は少ないだろう。また、かしかの水の勢いも衰えてきているのが現状だ。しかし私は、それでもお地藏様と村の人々が一丸となって守ってきてくれたかしかの水を、これからもみんなまで守り抜いていきたい。

綺麗な水を世界に広げるために

広島県立広島叡智学園中学校 二年 新田 一仁

あなたにとって水はどんな存在ですか？

僕は夏の暑い日を想像します。夏の暑い日にプールに入ったり、かき水を食べたったりしたら幸せですよ。他にも、飲み水として使ったり、洗濯・お風呂などにも水は使っていると思います。つまり、私たちにあって水とは身近であって当たり前存在なのです。

では、その水はにこっていますか？

答えはすぐに出てくると思います。私たちが、飲んでいる水も入っているプールもにこっていません。つまり、私たちは当たり前のように綺麗な水を毎日使っているのです。

では、世界的に綺麗な水を使うということは、当たり前だと思えますか？

ユニセフは「今、安全な水を手に入れられない人は、世界で六億六三〇〇万人にのぼります。」と警鐘を鳴らしています。この、六億六三〇〇万人は日本の人口の約六倍です。このような人たちは、水は身近な存在では到底ありません。そのため、学校の時間を惜しんで水を川に汲みに行く子供たちも多くいます。汲みに行っている川も綺麗な川ではなく、体に悪いようなものを多く含んでいるようなにこった川です。その川を飲み続けてしまうと、汚くなってしまいます。ユニセフによると、「毎日八〇〇人もの子供が、汚れた水や不衛生な環境が原因で命を落としています。」とあります。一日に八〇〇人です。でも、これが現実なんです。

その点、僕たちはものすごく恵まれています。だからこそ、この水の問題にしっかりと向き合う必要があると思います。困っている人を助ける使命があると思います。

僕は、この水問題を解決する方法を考えていると一つのことわざを思い浮かべました。

ちりも積もれば山となる

これは、ちりのような小さいものでも地道に貯めれば山のように大きなものになるということわざです。このちりを、綺麗な水の一滴としましょう。手を洗うときに一滴がまん。風呂をためるときに一滴ずつがまん。このように、一つの行動に一滴ずつがまんしていくと一年で水たまりができるでしょう。十年でプールができて、百年で川ができていくというふうに少しのがまんで大きなものになっていきます。

しかし、僕は自分が生きている間には世界中の人たちが安心して水を飲める環境を作りたいと思っています。それが使命であり、僕の夢です。そのため、この『一滴がまんプロジェクト』を周りの人へシェアしていくことが大切だと思います。そうすることで、一人の一滴が十人の十滴に変わり、一年で水たまりがプールに変わると思います。

一滴がまんすることも『一滴がまんプロジェクト』をシェアすることもそんなに難しいものではないと思います。一つの意識が世界を変えると思えばやる気が湧いてきませんか。

僕にとっての水とは僕の将来の夢を後押ししてくれる存在です。僕は、この『一滴がまんプロジェクト』を行って世界中の人を水で笑顔にしたいと思っています。

皆さんにとって『水』とはどのような存在ですか？

「見えない水」について考える

広島修道大学ひろしま協創中学校 三年 沖本 万泰

人口増加や、環境破壊・気候変動問題と並んで、世界規模での水不足を引き起こす懸念材料となっているバーチャルウォーターについて、あなたはご存知だろうか。

バーチャルウォーター（仮想水）とは、食料を輸入している国、その輸入した食料を自国で生産した場合に必要なとされる水の量のことを指している。その中には食料そのものを作るために要した水も含まれるため、食料と一緒に間接的に水も輸入しているとも言えるのだ。このバーチャルウォーターを多く必要とする食料の代表格は、穀物や畜産物だ。例えば一キログラムを生産するのに必要な水は、小麦の場合で二千リットル、牛肉では二万六千リットルとされている。特に畜産物については、生育に必要な飼料の水も含まれるため、穀物と比較するとより多くの水を要することになる。食料自給率が三十八パーセントである日本は食料の輸入依存度が非常に高く、実はバーチャルウォーターは私達の生活と密接に結びついているのだ。

私はバーチャルウォーターという存在について、最近まで全く知らなかった。環境問題について調べている際に、たまたま目にしたのがバーチャルウォーターについて書かれた記事だった。詳しく調べると、バーチャルウォーターを多く輸入している国は、上位からオランダ、イタリア、ドイツとなっており、日本は六位であるということが分かった。人口が多かったり、食料自給率の低い先進国は、バーチャルウォーターの輸入上位国となる傾向が強いようだ。また、一人あたりのバーチャルウォーターの輸入量は、日本は百リットルとなっており、かなりの量の水を消費していることが分かる。しかし、一位のオランダの輸入量は四百七十

万リットルとなっており、二位のイタリアの百七十一リットルに対し、二倍以上もの差をつけている。私は思わず、声をあげて驚いてしまった。次に、逆の立場、つまりバーチャルウォーターを輸出している側の国に注目してみると、深刻な水不足による問題が見えてくる。例えば、世界最大の地下水の輸出国であるパキスタンでは、利用可能な水が毎年減少しており、バーチャルウォーターの代表的な輸出国であるインドでは、実は飲み水の七十パーセントが汚染された状態であるという。経済的に輸出が欠かせない国ほど、輸出によって水不足が加速しているという負の状態に陥っているのだ。

「見えない水」であるバーチャルウォーター。それ故に、私達は水を大量に消費していると意識しづらい。しかし、私達人間や動植物にとって、水は絶対的に必要不可欠な存在だ。今後その恵みに感謝しながら、適正に使わせていただくという意識を持つことが大切だと改めて感じた。そのためには見える水と同様に、見えない水の節約も心がけ、行動に移していくことは急務だ。

バーチャルウォーターを減らすためにできることには、積極的な地産地消を心がけたり、食品ロスをなくすことなどがある。地産地消が活発に行われれば、地域の農家の支援に繋がりが、結果として食料自給率の向上が見込まれる。バーチャルウォーターは食料自給率の低さが起因であるので、食料自給率を上げることが根本的な問題の解決に繋がっていく。また、食品ロスを発生させないことでゴミの量を減らし、ゴミを燃やすことで発生する温室効果ガスの削減が期待できる。地球温暖化の原因である温室効果ガスの発生を抑えることは、地球環境にとって喜ばしいことだ。

今後も水資源の恩恵を享受できるかは、今まさに、これからの私達の行動にかかっている。一人ずつの行動を積み重ねることで水をめぐる格差をなくし、水の惑星である地球を私達自身の手で守っていききたい。